

博物館だより

No.224

令和7年7月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津 1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

博物館休館日カレンダー
2025年7月

日	月	火	水	木	金	土
29	30	1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31	1	2

休館日 ※情報はR7.6.20現在

令和6年度の最優秀作品「蛇淵の滝」▶
約千点の作品を1次審査で6点に絞り、これを博
物館の有料入場者投票で最優秀を決定します。

写真は1次審査の様子。力作ぞろいのため、審査員も
思わず目を見張ります。▼



博物館では「ふるさと遺産（＝ふるさと自然と文化・歴史に育まれた景色や遺跡・伝統行事など）絵画コンクールを実施します。
夏休みを利用して、あなたがお住まいの地域の、豊かな歴史・文化遺産の「みどころ」や「お気に入り」を描くというコンクールです。
作品の応募要領は次の通りです。皆さん奮って応募下さい！

◆博物館NEWS わたしのお気に入り 「ふるさと遺産」絵画コンクール 作品大募集!!

◆応募要領

★募集テーマ

「ふるさと遺産」であれば人物・自然・文化遺産などテーマは自由

★応募作品の仕様

四つ切の画用紙を使用して下さい。使用する画材は水彩絵の具、クレヨンなど自由ですが、油絵は応募できません。

★応募資格

みやこ町内にお住まいか、みやこ町内の学校に通う小中学生。

★応募できる作品数

一人につき1点

★応募方法

応募票に必要事項を記入し、画用紙裏面に貼り付け、左記の応募先に郵送または持参して下さい。

作品の応募は、学校単位、個人どちらでも受け付けます。

なお、氏名には「必ず」ふりがなをふって下さい。

★応募締め切り

令和7年9月12日（金）必着

このほかの詳しい応募要領については博物館 ☎33-4666へお問合せ下さい。



◆講座・教室・催し物ガイド

7月の歴史講座

【漢詩紀行講座】

7月5日（土） 9時30分～

【古文書講座】

7月12日（土） 10時～

【古典かな講座】

7月19日（土） 9時30分～

【みやこ学講座】

※休講します

※日程等変更となる場合があります。※見学会等は別途ご案内します。

◆博物館で楽しく学びませんか？



▲ボランティアの皆さんによるミーティング。今年から自主運営を目指しています。

博物館は郷土資料と学芸員らのサポートによる知と学びの拠点です。以下の会や講座を利用して楽しく学びませんか？詳しくは博物館へお問合せ下さい！

★博物館友の会

バスハイク・歴史たんけんウォーク等の学びの旅やイベントに参加できます。

★文化遺産ボランティア（豊み隊）養成講座

町の宝を三つのアクション①ガイド（案内）②ガード（管理）③ワーク（調査＆学び支援）でサポートするスタッフを募集・養成する講座です。

5・6月の業務日誌から

5月18日、博物館友の会定期総会で地域史研究者・川本氏による「江戸時代の名医たち」と題した記念講演が行われました。新技術や家伝薬で研鑽を重ねる、江戸の名医たちの姿は興味深いものでした。

5～6月にかけて、歴史や地域学習で、町内小学校の児童245名が博物館に来館し、町内の史跡を巡りました。限られた時間の中で、この町の歴史のすばらしさを学び誇りに感じることができたようです。



▲展示資料について、教科書に沿った形で学芸員が説明を行いました。（写真は犀川小学校の児童）



▲地元の知られざる歴史に熱心に聞き入る参加者の皆さん

「桃から探る みやこの歴史」

178

魔除けと不老長寿の果物

桃が店頭に並ぶ季節になりました。パイやパフェなどスイーツに欠かせない桃ですが、その利用は古く、長崎県の伊木力遺跡では、国内最古の事例となった約6000年前の桃の種が出土しています。桃は、国内で古くから利用されてきた数少ない果物のひとつですが、古来より西洋では林檎、東洋では桃の果実には聖なる力が宿ると考えられていました。桃の原産地の中国では、邪気（悪い気）を祓（はら）い不老長寿をもたらす霊的な果物として珍重され、『西遊記』でも、孫悟空が「不老不死の仙桃」を盗み食いする場面がみられます。この思想は、そのまま日本にも伝えられ『古事記』、『日本書紀』には「雷神」に追われた際、これを撃退するために霊力を宿す、山ブドウの実、筍、櫛を投げますが、退治できず、最後に桃の実をぶつけ、ようやく難を逃れたという記述がみられます。今回は、出土した桃の種が、みやこ町にある遺跡の重要性を裏付けるきっかけになった大変珍しい事例についてご紹介します。

桃といえば「桃太郎」

「桃」を題材にした日本のお話のひとつに「桃太郎」があります。桃の実から生まれた「桃太郎」は、おじいさん、おばあさんに育てら

れイヌ、サル、キジを従えて鬼退治に行くというストーリーです。この物語を古代の思想を踏まえて考えると「牛の角」を生やし「虎の腰巻き」を履いた鬼は、風水で丑と寅の方向（北東）である「鬼門」を表現しています。これに対して「裏鬼門」にある十二支の動物が戌、申、酉（キジ）で、これを率いたのが、邪気を祓う果物の「桃」を冠した桃太郎になったのではという見解がみられます。この物語の主人公が「梨太郎」でも「梅太郎」でもなく「桃太郎」でなければならなかったのは、桃が唯一強い霊力を宿す果物と考えられていたことがその理由とみられます。桃太郎の勇ましいイメージとは対照的な、3月3日の「桃の節句」もまた、桃の霊力によって女兒の健やかな成長を祈る行事とされています。

桃を用いた儀式の歴史

このように「霊力を宿した果物」と考えられた桃は、弥生時代後期頃には、重要な儀式に用いられています。平成22年（2010）邪馬台国の候補地のひとつである奈良県の纏向遺跡から2,765個の桃の種（桃核）が出土しました。これらを詳細に分析したところ、卑弥呼が活躍したとされる西暦135〜230年頃に収穫された可能性が



八反田遺跡から出土した「案」の復元品（みやこ町国作）

高いという結果となりました。また卑弥呼が儀式によって国を治めたという記録と併せて「卑弥呼の宮殿跡の可能性」を示唆する報道が注目を集めました。また島根県の小山遺跡では、当時の桃を忠実に再現した「桃形土製品」が出土しています。この土製品は弥生時代後半頃の作とみられ3.6cmほどの大きさであることから、当時の桃は、現在のスモモに近い大きさであったとみられます。全国で弥生〜古墳時代の遺跡から出土した果物をみると桃が最も多く、この他、李、梅、柿、梨などの種が出土しています。また、聖徳太子ゆかりの法隆寺金堂で解体修理が行われた際、柱の一部に設けられた穴から30個をこえる桃の種（桃核）が発見されています。いずれの種にも穴が開けられており、数珠のように紐でつながれていたものと思われる。『日本書紀』の記載をみると法隆寺は落雷により焼失したとされ、その再建に際して桃の霊力による落雷防止を祈願し



八反田遺跡から出土した桃の種（みやこ町国作）

て金堂の柱に納められたものと思われる。古代の桃は果肉が固く甘味も乏しかったとみられ、梅干しのように塩漬けにして食べられていたものと推察されます。桃が邪気を祓う果物と考えられてきたもう一つの理由として、桃が古くから薬材として用いられたことが挙げられます。桃は果肉から、種子、花、葉、枝、根にいたるまで、幹以外は全て薬材に用いられており、特に桃の種子（桃核）の中にある「桃仁」は貴重な薬として珍重されました。各種の記録や出土遺物などから、この桃仁は、奈良〜平安時代にかけての宮中で医療を司った「典薬寮」（現在の厚生労働省に該当）に諸国から貢納される重要な薬材であったことを伺うことができます。7月7日は七夕ですが、この行事は、天平6年（734）に宮中で始まったとみられており、桃の実が熟れる時期と重なることから当時は、他の供物と共に桃を供え、祀ったと伝えられています。

1800年前の桃の種

東九州自動車道の建設に伴い調査された遺跡のひとつが、みやこ町国作にある「八反田遺跡」です。調査の結果、弥生時代後期頃（約1800年前）につくられた大型の



八反田遺跡から出土した銅戈（みやこ町国作）

溝から当時使われていた土器や各種の木製品とともに、大量の桃の種が出土しました。この桃の種の用途を考える上で、特に注目を集めた出土遺物が「案」とよばれる、木製の机と、「銅戈」と呼ばれる武器の形をした儀式の道具です。八反田遺跡から出土したこの2つの遺物は全国的にもても出土例が少なく、特に張出部を備えた案の出土事例は国内唯一であり、また銅戈が遺跡から出土した事例も京築地域で唯一となります。銅戈は九州北部で最も重要な儀式の道具であり、他の遺跡では木箱に入れて埋納されるなど丁寧に扱われた痕跡が伺えますが、この遺跡から出土した銅戈は出土個体だけでも8つに割られるなど極めて珍しい出土事例として注目を集めました。国内遺跡の発掘調査結果から纏向遺跡をはじめ、卑弥呼が活躍した弥生時代後期頃の重要な遺跡では、水に関わる特別な儀式が執り行われたことが確認されています。

以上のことから卑弥呼の時代に、邪馬台国と同様のクニが八反田遺跡や川の上遺跡がある、みやこ町国作から徳永にかけて存在し、八反田遺跡の大溝では大量の桃をはじめ、案や銅戈などを用いた非常に重要な儀式が執り行われたことが推察されます。この地域は豊前・豊後を含む「豊の国」の拠点地域であった可能性を伺わせる記録がみられますが、弥生時代の後期頃から、このみやこ町が文字通りの「みやこ」であった可能性について、桃の種をはじめとしたこれらの遺物からその一端を垣間見ることが出来ます。（井上信隆）